
「川の字」文化の深層心理学

親子の添い寝と「見るなの禁止」

北山 修，萩本 快編

岩波書店，四六判246頁，2,970円，2024年4月刊

（京都大学名誉教授・京都ヘルメス研究所）**山中康裕**

北山修・萩本快らが、「川の字」文化をテーマに、江戸学の田中優子教授を招いてシンポジウムを開いていることは知っていた。また、かつては、北山が浮世絵のなかでも「春画」と呼ばれる特殊な絵をもとに、「共視論」という画期的な論陣を張っていたことも知っていた。このたび、それらが合わさって、一冊の本になった。評者は、そういうわけで、以前からの彼らの仕事を知っていたので、本書の書評に手を挙げたのである。

北山修氏は、言わずと知れた有名人で、というのは、イギリスのピートルズの華やかな活躍の頃、すでに京都府立医大学生時代初期に結成したザ・

フォーク・クルセイダーズで、彼らのグループが解散した際に作った300枚のレコードが大手の目に留まり、これが爆発的に3万枚売れて以来、作詞家として活躍して300曲も発表し、また歌手としては細々と現在に至るまで年1回の公演は維持している日本歌謡界の異色スターだからである。しかも、われわれ精神医学・心理臨床のうちとくに精神療法の世界でも、九州大学の教育学部のみならず医学部教授を二つながら務め上げ、やがては白鷗大学の学長なのだから、この世界でも、第一級の仕事をした人であるからだ。しかし、そんなことは、もはや誰でも知っていることで、ここにわざわざ^{あげつら}論う必要などさらさらないはずだ。評者が、ここで論じたいのは、そんなことではなく、本誌で明らかになった、彼の、国際精神分析協会および学会のみならず、日本精神分析協会および学会でも、第一級の仕事をなし遂げていることを確認できたからだ。それはインドのジュマ・バサクが、彼のいくつかの英文論文をつぶさに読んで本書に寄稿している論文（石川与志也の訳）からも窺える。つまり、彼の、浮世絵版画を素材としての「共視論」や、フロイトの「狼男（Wolf-Man）」事例を基とする「見るな禁止（Prohibition of don't look）」論、および、古澤平作にもとづく小此木啓吾との「阿闍世コンプレックス」論など一連のオリジナルな精神分析的仕事が、国内ばかりでなく国際的にもきちんと英文で次々と発表され、日本では、法政大学の元学長だった田中優子氏を招いてのシンポジウムで再三にわたって、それらの問題を論じ、とうとう、一書に結実する形で、なったのが本書なのである。

ここにおいて、本書の主題である「川の字」文化とは、日本の寝室状況が、父・子・母の3者が、ともに同衾している situation のことで、最近では、これも変質して、西欧流の分離独立状況になって、かえって、「少子化」や「甘え不足」状況を生んでしまっ、さらに新たな愛着障害を生じさせ、全く別状況を現出してしまっているのだが、かつては、狭い日本家屋の中で、身を寄せ合って寝ていた文化のことを指し、本書では、岡村斉恵・鈴木菜実子・笠井さつきの女性論陣が頑張って、むしろその状況が、「子をはぐくむ（羽包む・孵む・育む）」こと、つまり、温かい「子育て」環境でもあったことや、先の、「共視論」とは別に、「女とは、妊娠・出産」という最も大切な事態をなす「場」を提供するものという

「女性論」の根本的展開にまで発展しているのである。

彼らの論陣によれば、フロイトの提唱した「原光景（Urszene）」は、狼男（Wolf-Man）がドアの外からのぞき見する「視覚型」外傷体験であるのに対して、日本の子どもたちは、川の字で寝ている背後から感じる振動と息切れと囁き声でなる「捲込まれ型」であって、必ずしも外傷を生じるわけではなく、これによつてはぐくまれつつ、性の目覚めを伴った独特の子育てであることを主張する、画期的な立論を含んだものなのである。言いたいことはまだいっぱいあるが、一つ関係ないことのようなが、妙木浩之の報告している「交互スクリブル（mutual scribble）」というのは、実は筆者による妙名で、彼はウィニコットの方法のつもりで書いているが、ウィニコットのは「スクイグル（squiggle）」で別法である。そこらあたりの微妙な児童セラピーの記述が、本来は厳密な表記にこだわるべき精神分析者としてはやや疎漏であることが残念である。とにかく、日本の精神分析も、まったくオリジナルな発想を世界に発しているコトこそが一番の眼目なので、ぜひ、精神分析に関心の深い読者には必読だと思う。